

第 611 回：論文やレポートの書き方について (11) (DM)

みなさま、こんにちは。LA 毎週月曜 12 時～15 時担当、博士課程 2 年の DM です。

今回は、外大生として資料調査をするとはどういうことかを学んでいきました。今回は、外大図書館を拠点とした資料調査の実践に先立ち、問題設定と資料調査の関連性について考えていきたいと思います。

今回、資料調査との関連において強調したいのが、「細かい問題設定は先行研究を読み込みながら行っていくものである。最初から細かく設定することはできない」ということです。

もちろん、問題設定は最初に行うべき作業です。とはいえ、最初に設定した問題というものは、作業を進めていくにつれて、段々と形が変わっていくものです。たとえば、資料調査で先行研究が集まらなかったら、より集まるような問題に設定し直すことになります。また、調査対象や先行研究を読み込み、知識を得ていくうちに、より自分の関心に近い問題が設定可能だと分かったなら、それに即した問題に設定し直すことになります。

曖昧な問題設定は駄目ですが、自分の設定した問題に固執しすぎるのも、その後の作業のことを考えると、あまりよろしくありません。だからこそ、問題設定は、それが具体的なものであるならば、初期段階に限っては、ある程度は大まかに留めておくのがよいかなと思います。

これを私のレポート作成に当てはめると、私の問題設定はかなり失敗しているのが分かります。

この連載の第 3 回から第 8 回を読み直してみると、私の問題設定は、なんだか空回り

しているのが分かります。その理由は、おそらく、あまりよく知らない調査対象をわざわざ自分で選び、しかも、最初から細かい問題設定を行おうとさえしているからだと思われます。基礎知識もないままでまともな問題設定などできるはずもないことは、前回、前々回の連載分でお伝えした通りです。また、細かい問題設定は先行研究を読み込んだ後ですべきだということは、上の段落で説明した通りです。これでは上手くいく筈ありません。

とはいえ、結果から言えば、ここからでも修正は可能でした。具体的には、1)『文章読本』から明らかにしたい主題を、「含蓄」という一単語から、「言葉の不自由さ」という、もう少し余裕のあるものに変更し、それと並行して、2) 外大図書館所蔵の『谷崎潤一郎：没後五十年、文学の奇蹟』というムック本の中から、「言葉の間接性」(渡辺直己)という、「1」と関連のありそうな主題を探し当てる——この二つの作業を経ることで、何とか軌道を修正することができたのでした。

ここで肝心なのは、『読本』を読んで私が直感で思いついた「言葉の不自由さ」という主題が、単に直感で終わるのでなく、谷崎潤一郎研究において一定の客観性を得ていると思われる「言葉の間接性」という主題と結びついている——少なくとも、その可能性はある——ということです。このように、ある程度の見通しが立っていれば、資料調査以降、それを深めていくことができるでしょう。

というわけで、次回の LA 通信では、この実践過程について、詳しく説明していきたいと思います。みなさま、どうぞよろしくお願い

第 611 回：論文やレポートの書き方について（11）（DM）

いたします。

参考文献

『谷崎潤一郎：没後五十年、文学の奇蹟』河
出書房新社、2015 年